

平成26年度継続課題に係る継続評価書 (平成25年度採択課題向け)

研究機関 : 日本電気(株)、日本電信電話(株)、エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ(株)、富士通(株)、(株)日立製作所

研究開発課題 : ネットワーク仮想化技術の研究開発
II ネットワーク仮想化統合技術の研究開発

研究開発期間 : 平成25年度 ～ 平成27年度

代表研究責任者 : 日本電気(株)情報・ナレッジ研究所 所長代理 岩田 淳

■ 総合評価 : 適

(評価点 19点 / 25点中)

(総論)

本研究開発は時宜を得たものであり、モバイルなどのユースケースを基にテーマを重点化し、海外展開を視野にスピード感を持って進めて欲しい。

(コメント)

- 時宜を得た研究開発で、スピード感を持って進めて欲しい。
- モバイルなどのビジネスを含め、海外展開に力を入れて欲しい。
- ユースケースを前提に各社の強みを明確にした上で、進めること。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況及びアウトカム
目標の達成に向けた取組みの実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

設定した目標(要素技術)は概ね達成しているが、上位の抽象化等については、更なる取組みが必要である。

(コメント)

- 設定した目標を概ね達成している。
- 要素技術の高度化に注力しているが、上位の抽象化等についてはもう一つという感がある。
- 将来的な公衆網への適用を目指し、要素技術が確立した。

(2) 当該年度における研究資金使用状況

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

各社の得意分野の要素技術開発等に注力しがちだが、5社のコラボレーションやユースケース等の検討にもっと注力すべきである。

(コメント)

- ユースケース等の検討などにも、もう少しリソースを割いてもよかった。
- 各社の得意な点(要素技術開発等)に力も気持ちも行き勝ちのようで、コラボへの注力がもっと必要ではないか。
- 研究資金の使用によって、要素技術の開発は進んでいる。

(3) 研究開発実施計画及びアウトカム目標の達成に向けた取組み

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

次年度の資源抽象化レイヤの取組みが、各社間のコラボレーションの成否を分けるキーとなる。ユースケースを明確にし、それに向かって技術を統合させていくことが必要である。

(コメント)

- 次年度の資源抽象化レイヤにおける各社のコラボが成否を分けるキーとなる。難しさなどもよく把握しているようであるが、スムーズな実施には相当の努力が必要だろう。
- ユースケースを明確にし、それに向かって技術を統合させていくこと。

(4) 予算計画

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

研究計画に対してメリハリを付け、今後の資金計画の重点化を更に明確化していくべきである。

(コメント)

- 予算減額に対する回復策は一応考慮されている。
- 各社の自己のビジネス展開に向けた投資も期待するという考え方で努力されたい。
- メリハリを付け重点化する所をはっきり打ち出すべきである。
- 減額にも上手く対応している。

(5) 実施体制

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

プロジェクトに関するフォーラムや組織との連携を適切に行ってきているが、より明確なユースケースの提案などで、ビジネスプロデューサをより活用すべきである。

(コメント)

- ビジネスプロデューサの役割がもう一つはっきりしない。
- より明確なユースケースの提案、グローバルな視点による自己評価が期待される。
- 幹事会社のリーダーシップがよく効いている。
- OSS、沖縄など、外部との連携が上手く出来ている。